

## 18世紀中期、ドイツ、チューリンゲン地方のプリンシパルの音像

横田 宗隆

福岡女学院の新しいオルガンは、今まで日本で作られて来たオルガンとはおそらく多少違った様式を基にして作られており、製作者ガルニエ・マルク氏の設計前の資料提供にかかわった者として、そのオリジナル様式についての小論考をここに掲げたい。筆者の近年の研究から、今まであまり学界で論じられていない点だけをかいつまんで述べ、新築オルガンの晴れのお披露目に際してのご挨拶とさせていただきます。筆者

ヨハン・ゼバスチャン・バッハが接したオルガンは、当時の新築、そして一、二世代前からのオルガンを含め、ドイツ中部から北部に至って多様な様式と規模に渡っている。彼のそれぞれのオルガンに対するかかわり方を見ても多様であり、分類すると、彼が実際にオルガニストとして職に就き、日常的に弾いていたもの、修理や拡張の為に視察し、検査の依頼を受け、その報告書や、計画書を書いているもの、もしくは新築後の披露演奏を頼まれたもの、単に訪ねて行って弾いたもの、就職の為、又は演奏の勉強の為に訪ねた際に、見、聞き、あるいは弾いたと思われるもの、幼少時に修理拡大の仕事の現場にたまたま居合わせたものなどがある。

そのなかで、彼が幼少時代から馴染み、またオルガニストとなってからも長期に渡ってかかわった製作様式の中に、統合ドイツでは中部に位置する。チューリンゲン地方のオルガン製作様式がある。この地方は近年の統合まで東ドイツの領域にあり、西側諸国での研究が困難であった為と、北ドイツを中心に東北部オランダ、中東部ドイツでバッハより一世代前に活躍した有名なオルガン製作者、アルプ・シュニットガーと、同じく中部ドイツの、しかしこれはチューリンゲン州に隣接するザクセン州で活躍したゴットフリート・ジルバーマンという有名なオルガン製作者の仕事の陰に隠れて、一般にはあまり論じられなかった。

しかし近年、バッハの作曲、演奏様式との関係の重要性から、世界的にも取り上げられる事が多いこの様式のオルガンも、特にその地元以外の研究者や演奏家、また製作者にとっては、今日に至ってもその真実の姿が十分に理解されているとは言い難い。

この当時の、しかも特にこの地方などのプリンシパルの音色は器乐的、と形容されるかもしれない。よって、17世紀以前の“声乐的”と呼ばれるプリンシパルと対照的に扱われる。確かに、18世紀チューリンゲン地方のオルガンには、弦システムのストップが特に好まれた傾向はあるが、これはこのようなプリンシパルの音が全体に、あるいは特に低音域に於いて弦システムの音に近い事から指摘されているようである。しかし、当時の発声法、つまり、現在一般にオペラで使われるような自分自身で声に響きを上乘せするような発声法で

はなく、声の核だけを無理なく発し、それを多彩にコントロールするような当時一般の発声法からすれば、そのような分類はあまり正確な分類とは言えない。むしろそのスケージングの取り方や整音法によって、プリンシパルの低音部が非常に弦的な音がしたとしても、それは人声の低音が持つ豊富な倍音を思わせ、高音部に向けてその音色がより丸みを帯びて開放的な音に変化する事も、実はむしろ人声の特質をよく捉えていると言うこともできる。その結果として、プリンシパル単独で、複雑な対位法の各線が明瞭に浮かぶという事も特筆すべきである。

チューリング地方のオルガン製作様式を理解する上で、そのオルガンがどのように使われたか、また新築、修理や拡張工事の際に、どのような考えのもとにそれが計画されたかなどは、文献に残された記述から調査する事ができる。また、現在残っている楽器から多くを学ぶことができる。ただし残っているものでも、今日までの長い歴史の間に改変されたり、何らかの原因で破壊されてしまったものも多い。筆者は現在、このチューリング地方に非常に深い関係を持ち、実際の製作年代は多少後になり、しかもチューリングから移り住んだオルガン製作者の仕事の研究しているが、この楽器は実は、製作様式においてJ.S.バッハ生存当時のものをそのまま踏襲したような楽器であるだけでなく、数回の改変を通りながらも、ヨーロッパ全体を見渡しても稀な程、当時の状態をよく残している楽器なのである。このような楽器から、バッハのよく知っていたオルガンの特徴を探り当て、ひいては彼の音楽語法の理解の助けとし、演奏上のいろいろな決定、特にレジストレーションの技法などを探ろうという試みである。この楽器はリトゥアニア、ヴィルニウス市精霊教会にある楽器で、オルガン製作者、アダム・ゴッドロープ・カスパーニが1776年に完成したものである。製作者はこの楽器のハウプトヴェルク（第一手鍵盤、以下HW）に於いて、プリンシパル8'と、オクターヴ4'では歌口の高さの歌口幅に対する比率が低音から高音に至るに連れて大きく変化するという当時のプリンシパルに特徴的な整音法を施した。一般的には8'オルガンに於ける4'以上のストップのプレナム内のストップでは、低音から高音まで同比率でとられる歌口高さを持ち、ここでは鍵盤全域に渡って音色は比較的均一である。ストップ間では違うことはあっても、同じストップ内では同じ比率が保たれる。ちなみに、カスパーニは、オルガンケースの前面には一本も出ていないHWのオクターヴ4'に、なんとオクターヴプリンシパル4'と言う名称を付けている。これは、今まで論じられていない問題があるが、当時の、少なくともカスパーニの、プリンシパルという言葉の定義は、そのストップのオルガン内の位置によるのではなく、音響的もしくは音楽的な見地からの概念によるものであったのだと言えるだろう。

このような整音法では、必然的に低音部の倍音がより豊富になるが、同時に、パイプ足部の付け根に向かって窄まる度合いも、非常に適切に設計され、パイプが必要とする必要最小限の風量を供給する足穴寸法になっている。これは、発音時の自然かつ静かな基音の発生を可能にするひとつの要因でもある。この自然、という言葉の意味合いの中には、そ

の時間、つまり発音にかかる時間の事も含めている。当時のパイプ製作法、そして整音法の妙は、その発音にかかる時間がタッチによって適切に制御され、長過ぎず、しかもまた筆者の提起するところによれば、短過ぎない、というところにある。これはまた奏者が弾き方によって発音の長さや質を制御できる幅が大きいことにも起因して、広い表現力を内包したストップとなっている事に注目したい。

プリンシパルに関してもうひとつ特徴的な事は、ペダルのそれである。プリンシパルバス16'は歌口の低い、柔らかだが、弦系統の倍音豊かな、そして含みのある発音を持った音に作られ、静かな曲での線のはっきりした低音部に非常に役に立つ。ペダルには低音を非常に豊かに増強するストップが他に多く設けられており、プリンシパルの役割は強固な16'を単独で作る事ではない。また、オクターヴバス8'は、この楽器もこの様式の典型的の例外でなく、木管で作られている。その音は、手鍵盤のフルートを含み、デリケートな音の伴奏をソロで受け持つ事が多いこのストップにとって、非常に適切である。このストップの音量と音質の設定は、細心の注意を持って設計、調整されているといえよう。

この小論では、この時代のチューリングゲン地方のオルガンのプリンシパルの、特に16'、8'そして4'についてのみ考察したが、全体的に見て、多くの8'ストップの微妙で多彩な音色の妙、明るいデリケートなリード管の音色（しかし手鍵盤にはリードは非常に少ない）、ミクスチュアに内包された高音の三度管の効果、この当時のオルガン一般の特徴である、ペダルの極端とも言える重く低い低音ストップの充実、それに反したペダルの高音ストップの欠落など、非常に多くの特徴を持っているといえることができる。

この時代の音楽を演奏する際のレジストレーションを考える時、楽器がこれらの特徴を持っていて始めて、18世紀中期、中部ドイツのレジストレーションに関するアドルンク、アグリーコラ、バッハ、そしてカウフマンなどの多くの記述が我々にとってその真の意味を提示する。たとえ同ピッチのストップを数個重ねたとしても、その音を濁らせず、不必要に厚ぼったい音にもならず、それが後期バロック様式の音楽の意図を始めて明確に示してくれる事に気付けば、我々は驚嘆を持ってその歴史的記述と我々の感覚との符号に納得する事だろう。